

日本史

第1回 第1章 古代国家の形成と貴族文化の誕生

原始社会の生活と文化

執筆・講師
武藤正人

学習のねらい

人類が日本列島で生活を営みはじめた経緯や、旧石器文化から縄文文化への変化について、自然環境とのかかわりに着目して考察する。その際、年表や地図、遺構や遺物といった複数の資料を活用し、資料に基づいて歴史が叙述されていることを確認し、身近な地域における歴史資料への関心を高める。さらに、資料に基づき、黎明期の人々の生活や思想、信仰等について、自ら問いを立て、表現する。

日本列島の旧石器時代

地質学では更新世にあたる旧石器時代は、氷河期とも呼ばれる寒冷な時代で、日本列島が大陸と陸続きになることがあった。約3万数千年前、ナウマンゾウやオオツノジカなどの大型動物とともに、人類も日本列島に移り住むようになったと考えられている。彼らは、握槌、ナイフ型石器、尖頭器などの打製石器を用いて移動生活を営んだが、まだ土器は使用していなかった。

日本列島における旧石器時代の存在は、相沢忠洋による「岩宿の発見」によって証明された。彼は、1946年に群馬県の岩宿で、更新世に相当する関東ローム層のなかから打製石器を発見し、その後の調査により、旧石器時代の存在が認められたのである。その後、各地で更新世の地層から石器が発見され、現在では5000か所以上の旧石器時代の遺跡が確認されている。岩宿遺跡のほか、ナウマンゾウなどの骨が多く発見された長野県の野尻湖遺跡や、ほぼ完全な形で頭蓋骨が見つかった沖縄県の港川遺跡などが知られている。

縄文時代の生活

旧石器時代は、約1万数千年前から縄文時代に移る。その背景には、自然環境の大きな変化があった。旧石器時代の後期から地球は急速な温暖化が進み、海面が上昇し、日本列島が形成された。木の実の利用が拡大し、絶滅した大型動物にかわって増えた中小動物を得るために弓矢が用いられた。矢の先端に用いる石鏃や、石斧を構成する磨製石器などが使われるようになり、漁労のための釣り針やもりなども発見されている。この時代の文化を縄文文化といい、この時代を縄文時代とよぶ。縄文時代の人々は、採集・漁労を組み合わせて、竪穴住居での定住を行ったと考えられ、四季の変化によって、採集・狩猟・漁労を組み合わせることで、植物性・動物性の多様な食糧を獲得することができるようになった。

東京都の埋蔵文化財センターには、縄文時代の集落が再現されており、復元された竪穴住居を見ることができる。また、縄文時代の大規模集落の遺跡として、青森県の三内丸山遺跡^{さんないまるやま}が有名である。同遺跡では、およそ1500年間にわたって人々が定住生活を行っていたことが分かっている。巨大な掘立柱^{ほったてばしら}建物跡や墓地跡などの遺構、土器や土偶^{どぐう}、編籠^{あみかご}やひすいといった膨大な遺物から、縄文時代の拠点集落として注目されている。

縄文文化

縄文時代を特徴づける道具が縄文土器である。縄文土器は、煮炊きや貯蔵のための道具としてつくられ、食物を煮ることができるようになったために、人々の食生活は豊かになり、栄養をとりやすくなった。縄で文様がつけられたものが多いことから縄文土器とよばれているが、さまざまな形のものがあり、縄文時代は、土器の形態や出土層位によって、草創期、早期、前期、中期、後期、晩期の6期に分けられている。

縄文時代の生活を知るうえで重要な遺跡が貝塚^{かいづか}である。当時の海岸地域に数多く残る貝塚には、集落のごみとして捨てられた貝殻のほかに、土器や石器なども出土している。産地に限られる黒曜石^{こくようせき}やひすいなどの石器が広範囲で出土することから、集落の間の交易が進んでいたこともわかっている。遺物の調査から、植物の栽培が行われたことも指摘されている。

縄文時代の遺跡からは、妊婦や男性器をかたどった土偶^{せきぼう}や石棒^{せきぼう}が見つかったことから、子孫繁栄を祈る祭祀が行われたと考えられている。また、抜歯^{ぼっし}や屈葬^{くつそう}の風習が見られることから、呪術^{じゆじゆつ}や儀礼を重んじる生活が営まれていたことがわかる。動植物や自然現象にも霊魂^{れいこん}がやどると信じて崇拝することを、アニミズムというが、縄文時代の生活は、アニミズムと共にあったと考えられる。

このように、1万年近くも続いた縄文時代は、厳しくも豊かな自然をたくみに利用しながら、子孫繁栄を祈り、豊かな社会を発展させた。